



ベートーヴェンの「悲愴」と言う
ピアノソナタとリストの第六番ハ
ンガリー狂詩曲との比較

梁弘叡

ベートーヴェンの「悲愴」と言うピアノソナタとリストの第六番ハンガリー狂詩曲との比較

ベートーヴェンの「悲愴」と言うピアノソナタと リストの第六番ハンガリー狂詩曲との比較

ベートーヴェンの作品の風格は通常に厳しいが、リストのはロマンチックである。所が、本文はベートーヴェンの作品がロマンチックではないと言う意味ではない。たとえロマンチックであるが、厳しさも常に交じっているという意味である。

「悲愴」（ベートーヴェン）と第六番ハンガリー狂詩曲（リスト）は皆悲傷な作品であるが、二曲の風格は違う。違う鍵は厳しい事とロマンチックである事との差別である。「悲愴」は厳しい悲傷であるが、狂詩曲はロマンチックな悲傷である。前記と同じ、「悲愴」がロマンチックではないと言う意味ではない。ロマンチックであるが、厳しさもやはり交じっているという意味である。狂詩曲はロマンチックだけで、厳しさが無い。だから、「悲愴」と狂詩曲を比較すると、「悲愴」は厳しいが、狂詩曲はロマンチックである。

ある記録映画は「余命一ヶ月の花嫁」と言って、ドラマ映画に改編された。映画の中で女主人公は癌で余命一ヶ月しかなかった。しかし、男主人公は全く気にしなくて、矢張り喜んで彼女と結婚しようとする。映画はずい分悲傷であるが、ロマンチックでもある。もし映画の背景音楽が本文の二曲を一曲選ぶのに限り、しかも私を音楽監督に任用するとしたら、必ず躊躇(ためら)いなく狂詩曲を選ぶ。何故ならば、この映画は唯美、純粋なロマンチックさがあり、悲傷であるが、重くなく、厳しくない。「悲愴」が厳しくて、だから重い感じが有る。背景音楽としては不適合だからである。

注意：作者がドラマ映画を見た事が無いから、本文の内容は記録映画に限る。

同じ曲でも、市場で販売されるCDは違う演奏家のインタープリテーションや演奏し方が違うので、違う感じ、風格も有る。全ての演奏家が皆狂詩曲のロマンチックさと悲傷を表す事ができるのは不可能である。私の一番推賞するのは以下である。これは今まで私の聴いたのの中で最も悲傷、ロマンチックな版本である。

Liszt Piano Concertos

London Weekend Classics 421-629-2

Piano Concerto No. 1 in E-flat major (Royal Philharmonic Orchestra / Downes)

Piano Concerto No. 2 in A major (Royal Philharmonic Orchestra / Downes) Hungarian

Rhapsody No. 6



備考：もし「余命一ヶ月の花嫁」を制作なさるTBSテレビ会社は本文をご覧になりましたら、もう一度本文のお薦めの版本の狂詩曲を背景音楽として、この映画に付け直す事をお考えになっていかがでしょうか。